

# 私の保育ノート

## 発表会（劇遊び）——五歳児——の取り組み

京極桃子

（保育士）

子どもはお話を聞いたり、絵本を見ることが好きで、保育者の演ずる劇や子ども劇場などで見ることも好きだ。時々私が、お昼寝の前に、思いつくままに考えたお話をすることがある。その中に子どもは自分が登場すると、いつもの知っているお話の時は違って、喜んで聞いている。例えば、「あるところのリコちゃんという女の子がいました。リコちゃんは一人ではつまらないので、らいちゃんと一緒に遊ぼうと思って、らいちゃんのお家に行きました。『らいちゃん、遊ぼう』と言うと『うん。いいよ』』と言って、らいちゃんが出てきました。そこで二人は散歩に出かけることにしました。二人で歩いてい

くと、縄跳びをしているしおりちゃんに会いました。……』というように、順にクラスの子どもの名前を挙げてちよつとした出来事があつて話が続いていく、それだけでもとても面白がつている。自分や友達と一緒になつて話の中で、怖いものと戦つたり、嵐を乗り越えて航海できたりすると、えーっ？と友達同士布団の中で顔を見合わせたり、手を握り合つたりしている。空想の世界に生きているのだと実感する。

四月から時々そうした積み重ねもあり、発表会の劇遊びは、子どもたちの考えた話を取り入れてみようと思ひ、取り組んだ。

そこで、十二月に発表会があること、劇遊びをす

ることを伝え、どんな話にしようかと子どもたちと相談した。最初に出てきたのは、昨年のクラスで行った桃太郎の話や、既製の話だった。知っている話ではなく自分たちで考えた劇にしよう、こんなお話どうかなーとか、こういうの面白そうとか……と私が出ると、「うーん」と考えていたり、こういうのはどうかなーと意見が出てきたりしたが、自分たちで考えた話を劇にすることを今まで経験してこなかったこともあり、なかなか考えられない感じだった。

そこで、後日、外に出て皆でプール脇の坂に座り、どんなお話がいいかなーと投げかけてみた。すると、「虫の冒険」とパツと言った子がいて、他の子も「いいねー」と賛同。「なりたいたいものを考えよう」と言うのと、ちようちよ、カラス、鳥、カマキリ、トカゲ、ザリガニ、ハチ、人間、クモとそれぞれがなりたいたいものの名前を挙げた。「じゃあ、それになってちよつと園庭を一周してみよう」と言うと、子どもたちはどンドン出かけたし、手をひらひらさせて走り回っ

ていたが、口調、しぐさなど、だんだんその役になって過ごした。「川があつて、そこに細い木の橋とかが架かっているのがいいよ」と一人の子が出ると、一緒にいた友達が「その川からザリガニが出てくればいいね」と言い、話も広がりだしているように思えた。「カーカー」と言つて飛び回っていたカラスも、途中からカラスの郵便屋さんになって、地図を持つていることになったり、クモの巣の迷路で遊んだりもしていた。二人または三〜五人の小さなグループができ、それぞれが園庭の好きな所を動き回つて、子ども同士での会話も弾み、楽しそうだった。

別の日になり、どんなお話にしようかと聞くと、おのおの話はするのだが、子どもたちは同じことを繰り返して楽しいようで、自分の役のことだけが頭にあるようだった。だんだん戦いごっこなどになつていき、話の方向性が見えてこなかったもので、森に園外散歩に出かけてみることにした。

今まで歩いてきた道を少し変え、木々や草花、葉

つぱに目を向け、高い杉の林の中をのぞくように眺めたり、私もいつもより少々大げさな身振りや、「何か鳥が言ってるみたい」「あそこの葉っぱが揺れているよ」「木が折れているよ。何でだろう」など、芝居がかった言い方をして過ごした。子どもたちも話に入り、「てんぐがさあー、木のどこに来たんじやない?」「あの葉っぱの下に妖精がいて、魔法とかで動かしているのかも」などの言葉が子どもの中から出てきた。お話ししながらの散歩はとても楽しかったようで、「もつと散歩行きたい」と言う子もいて、その後も園外散歩の日を設けた。

園外保育を経て、再度お話づくりを始めると、「森の冒険にしよう」ということになった。どんな冒険にしようかと考えると、「みんなで力を合わせる」「宝物を見つけに行く」「てんぐが宝の所を開けてくれる」などの意見が出たが、どうやって宝物を見つけに行こうか、というところで皆の意見が止まった。しばらくして「道が分かれてる」との意見が出たので、分かれ道はどうしようと言うと、「どっちどっ

ちしてみる」ということになった。その場でみんな「どっちどっちえーべすさん」とやってみると、「道を間違えると、てんぐに驚かされる」という考えが子どもの中に出てきた。その後は何度も「どっちどっちえーべすさん」とやつては、てんぐが「わあー」と驚かすという遊びになり、驚かすー驚くの繰り返し楽しくてその日は一日過ごした。

次の日になると、「今日はいたずらでてんぐになって驚かす」という話が出たので、どうやっていたずらして驚かすかを考えながらやっていた。驚かすー驚くという行為が面白く、「石だと思っていたらてんぐだった」「いちごがあると思つて採ろうとしたらてんぐで、わあーってやる」など、てんぐがいろいろなものに変身していて、そうとは知らずに道を進んできた動物が驚かされる、という繰り返しが続いてきた。驚く演技がうまくなくていき、本当に驚いたようにオーバリアクションで床に何度も転がって、子どもはそれだけで楽しくて、何度も何度も「あー、びっくりした」「まっ

たく、てんぐのやつー」などのせりふも自然と子ども  
もの口から出ていた。その後は驚かすー驚くだけの  
劇が何日か続いた。

話は断片的だが、子どもたちの中に自分たちで考  
えたお話で遊ぶことの楽しさがだんだんにわかって  
きたようで、ザリガニのレストランになるという新  
しい話も出てくると、ストーリーが少しずつできて  
いった。

てんぐと森の動物という大きく二つのグループが  
でき、それぞれのグループの中に、話を引っ張って  
動いてくれる子が入るように配慮した。話が出来上  
がるまでは、それからまだ何日かかったが、役が  
決まり、話の流れができてくると、劇をして過ごす  
ことが面白く、楽しんで毎日が過ぎていった。

衣装などを着けなくても十分子どもは役になりき  
っていたが、段ボールや廃材で、それぞれが考えて  
身に着ける小物などを作った。役に特徴的なもの、  
ザリガニのハサミ、鳥の羽とくちばし、てんぐのう

ちわなど、一つあるだけで、さらに役の中に入って  
演じる助けになっていた。

自分たちで考えた劇をするのは本当に楽しいよう  
で、練習をしても笑いが絶えない毎日が送れたが、  
大人は、せりふを言う声の大きさや舞台の上での動  
きなど、お客さんに見てもらってこれで大丈夫なの  
かと心配だった。劇づくりの途中経過や、話のあら  
すじを載せた発表会の冊子をお家で一緒に読んでね  
と子どもに伝えたりして、保護者にも関心を持って  
もらって当日を迎えたこともよ  
かったようで、発表会を見てく  
れた保護者からは、「子どもた  
ちが楽しそうにやっていること  
がよかった」「子どもから話を  
聞かされていたから話もわかっ  
て楽しめた」との感想をもらう  
ことができ、成功に終わったと  
思っている。

